



TITLE:

ラダイツに関する若干の考察

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. ラダイツに関する若干の考察. 経済論叢 1956, 78(6): 431-454

ISSUE DATE:

1956-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132509>

RIGHT:

經濟論叢

第七十八卷 第六號

ラダイツに関する若干の考察……………穂 積 文 雄 (1)

交通経済学の序論的問題……………中 西 健 一 (25)

第一次大戦期における米国の海外投資……………岡 田 賢 一 (43)

世界経済とアメリカ (書評) ……………梅 津 和 郎 (61)

經濟論叢第七十七卷・第七十八卷総目録

[昭和三十一年十二月]

京都大學經濟學會

ラダイツに関する若干の考察

穂 積 文 雄

一 は し が き

わたくしは、ちかごろ、ラダイツについて一書をあらわした^り。それは、一、ラダイツの発生の原因・経過、二、その組織、三、その行動、四、それへの対策、五、その絶滅、の究明よりなり、プロローグにおいて、機械の論理の展開を、エピローグにおいて、その論理（補償説・解放説）の検討をこころみたものである。そして、それにおいて、わたくしは、なるべく、資料をしてみづからかたらしめようとした。そのことは、資料を適当な場所に登場せしめることにおいてなりたつ。わたくしの仕事は資料を蒐集整理して、体系化することではなければならない。しかるに、体系化は均齊を要請する。すくなくとも、わたくしは、その要請を感じる。当然、わたくしは、あまりに一部にこだわることをさげねばならなかった。一部をどこまでも掘り下げるわけにはゆかなかつた。割愛せねばならない場合があつた。説いてつくさぬうらみものこつた。わたくしは、いま、ここに、その若干をとりあげて、いささか補おうとおもう。

(1) 拙著、英国経済史の一断面——ラダイツの研究——

ラダイツに関する若干の考察

第七十八卷 四三一 第六号

一

二 機械の定義について

ラダイツは機械打ちこわしをおこなったものである。そこで、ラダイツ研究においてはまづ機械が問題となる。しからは機械とは何んであるか。

それにこたえることはむづかしい。すくなくとも、きわめて、わづらわしい。機械と道具の区別にいたって、とくに、そのはなはだしきをおぼえる。わたくしは、「普通に機械は作業機・動力機および配力機構よりなりたつ、」とする説をうけいれる。道具が発展してこのような構造をとるとき、そこに、機械の出現をみるとする。このみかたからすれば、機械と道具の別を動力が人間であるか否かに求めるのはかならずしもまちがいてはない。また、機械は作業機においてなりたつということも、否定できない。いづれも眞実にはちがいない。眞実にはちがいないが、一面の眞実であるにすぎぬことも、また眞実である。全面の眞実ではない。そのことを否定するわけにはゆかぬ。人力以外の動力によるものでも、作業機でないものは機械ではない。かくて牛車は機械ではない。作業機でも人力による間はまだ道具である。したがって、ケイのフライ・シャトルや、ハーグリーブスのジェンニー機は、まだ、機械とはいえぬことになる。アークライトの水力機にいたって、はじめて、機械の定義に該当するとしなければならぬ。

もつとも、人間以外の動力の利用はかならずしも作業機を招来する理由とはならない。これに反して、作業機は必然に動力機を招来する理由をもつ。作業機は人間の労働を単なる動力に化せしめる。そして、単なる動力としてなら、かならずしも、それが人間の労働でなければならぬことはない。それが一つの理由である。作業機は、それ

における、そのうごかず道具の数量が増大する。その結果、人力では不充分になる。いきおい、他のより強力なる動力を求めることになる。それが、いま一つの理由である。事実、人類がはじめて人間以外の動力を用いることを知ったのは悠遠のむかしのことである。機械の出現は最近のことに属する。才月を閲すること久しきものがある。そこに必然の關係はみいだしたがたいといってよからう。しかるに、作業機の登場はたちまちにして機械の出現をうながしている。かくて、機械の出現における作業機の意義はきわめて大なるものがあるのをみとめなければならぬであろう。だが、しかしながら、機械を解して、作業機・動力機および配力機構よりなるものとすれば、作業機において、ただちに機械をみるわけにはゆかない。それは隻手の声をきくとするたくいではない。だれか隻手の声をきかんやである。たとい、作業機の意義が大であるとしても、動力機なきところに機械ありとはいへぬ理でなければならぬ。鐘の音を発するにおいて、鐘の意義は大である。しかも、「鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木のあいが鳴る」といわれてみれば、なるほどうなづかぬわけにはゆかないであろう。それと、理においてことなるところはあるまい。

かういうと、しかし、とひとはいうかも知れない。ミシンをどうしてくれる、と。ミシンは外来語である。原名マシンである。^①マシンが転訛してミシンとなったのである。いまでこそ、人間以外の動力によるものもある。しかし、それがはじめてその名でよばれたころは人の手でうごかされていたものである。それにもかかわらずこれをマシンとよぶ。そうすれば、作業機すなわち機械ということにならねばならない。しかしながら、それなら、作業機をさして道具とよぶ場合だつてある。もともと道具ということとは広い意味をもっている。したがって、作業機だつて、ここにいる機械だつてふくませることができないわけではない。それでは機械と道具の区別は一体どうい

ことになるのであろうか。おもうに、およそ、道具といい、機械という、いづれも、一つの名辞である。名辞は、もと、実体に付せられた符牒にすぎない。名辞から実体が出るのではない。実体があつて、名辞があたえられるのである。そして、その場合、ひとは、常にならずしも、精確・厳密であるとはかぎらないのである。だから明確をかくことがめづらしくない。混乱を生ずることがすくなくない。そこで、それをさけるために、名辞と実体の關係を精確厳密に規定しようとすることになる。そこに定義がうまれる。だから、定義は一の約束にほかならない。いま、道具と機械の區別といつても、要するに定義として、はじめて、いえることである。だから、それは約束上のことにすぎない。すてに約束である。約束を承認するものの間においてのみ有効であることはいうまでもない。そうでないひとびとを拘束することはできない。そのようなひとからは異議も出ようというものである。その場合、かれらは共通の広場に立つていないのである。だからどこまで行つても意見の合致をみないであらう。そのことにふしぎはない。それはしかたのないことである。しかたがないなら、定義など立ててみてもはじまらないのではないか、というひとがあるかも知れない。しかし、それはそうではないとおもう。共通の広場に立つものの間でありとも、名辞の精確厳密が得られることは、やはり、それだけプラスになるといえよう。そして、プラスがみとめられれば、やがて、共通の広場は次第に拡大するであらう。そして、そのことはそのプラスがいよいよ大となることにほかならない。わたくしは定義は約束だというた。約束はどうでもきめることができよう。それなら、定義はどう立ててもよいか。そういわれるとこまる。そこには、やはり、一応の制約があることをみとめなければならいであらう。それはほかでもない。そう約束することが無理でないということが必要であらう。無理でないということとは、それが現実から遊離していないということである。現実から遊離した定義は百害あつて一利があるまい。そ

れから、つぎには、そう約束することが現実をとりあつかうに役立つということである。役立たない定義を立てることはナンセンスである。ことばの遊戲にすぎない。

わたくしは、「普通に機械は作業機、動力機および配力機構よりなりたつ」とする説をうけいれる。それは一の定義である。ところで、この定義によれば、動力機なき作業機は機械でないことになり、動力機があっても作業機がなければ機械ではないことになる。それはすでにみたところのごとくである。しかしながら、この定義には「普通」という規定詞がある。そうすると、かかるものをも機械とよぶことを許容しうることにならねばならない。だが、それは、実に、定義のもつこの制約、現実より遊離することをさけ、嚴実を処理するにおいて無益におちいるの弊をまぬがれんがためにほかならない。けだし、現実には、機械と道具のツヴィッシェン・ゲビートに存するとかんがえられるものがたくさんある。そうである以上、それは、しばらく、しかたがないとおもうからである。

機械における作業機の意義は大きい。作業機をもつてただちに機械とする説さえある。それは前述のごとくである。ところで、その作業機はどうして出現したか。人類のもつとも原始的な生産要具はその肉体的機関とくに手である。しかるに、その力はよわい。そこでその延長拡大として道具がうまれる。しかし、道具はやはり手でうごかされる。しかるに手は二本しかない。だから利用する道具の数に制限がある。人間はその制限をこえんとする。その悲願が、作業機となった。そうかんがえてよからう。ハーグリーブスのジェンニー機のごときはまさにそれである。わたくしは、わたくしの著書において、そういうふうに解しておいた。そして、それはそれでよいとおもう。だが、作業機出現の要因をそういう説明のみで足れりとするのはどうか。ケーのフライ・シャトルのごときはやはり一箇の梭をうごかすにすぎないではないか。しかも、それは普通作業機とかんがえられている。これを作業機で

ないとするのは現実にそぐはない。現実より遊離する。そして、現実より遊離して作業機の定義を立てることの不可なることはすでに述べたところよりしてあきらかなところである。そこで、作業機出現の要因の説明はかかる場合をもふくめて説明できるものでなければならぬことになる。それでは、それは、どうあるべきか。それは、こうあるべきであろう。すなわち、ひとは道具をより有効につかおうとする。それには二つの道がありうる。一つは量的に同時により多数の道具をつかうことにおいてなりたつもの。他は質的に道具をより迅速円滑につかうことにおいてなりたつもの。作業機成立の要因をかく修正することは、作業機の本質をあきらかにする上からいっても都合がよい。ただし、作業機の成立の要因の説明を人間の手がうごかしうる道具の数の制限を克服せんとする悲願にのみとめるときは、作業機の本質を、そのうごかしうる道具の数量からきりはなしてみたいがたくなることをまぬがれないであろう。しかるに、そうすることは感心できない。なぜかなれば、作業機における道具の数はかならずしも一定してはいない。またたえず増加する傾向にあることもいふべきである。さらに、それが一箇の場合さえある。だから、作業機の本質はそのうごかしうる道具の数量から独立に追求せられねばならない。かくて、作業機の本質は道具の操縦が人より機構にうつるところにみいださるべきを知ることができることになる。それだからである。

- (1) 拙著、同上、一―四。
- (2) 広辞苑。
- (3) 拙著、同上。

三 機械うちこはし運動とラダイツの関係について

ラダイツは機械打ちこわし運動をおこなったものである。しかしながら機械うちこわし運動をおこなったもの、かならずしも、ラダイツではない。それはいうまでもないところである。それに異議をとえるものはあるまい。しかし、これについて、なお、いうべきことが二つある。その一つは、しからばラダイツは機械打ちこわし運動をおこなったものの中のいかなるものであるかということである。その場合、それがイギリスにおけるものであることはわかりつたことがらに属する。それは、けつして、シュレンジエンや、リオンにおけるものをふくまない。それはあらためてのべるまでもないところであろう。それでは、イギリスにおける機械打ちこわし運動をおこなったものはみなラダイツかといえば、それがそうでないことも議論の余地はないといつてさしつかえないであらう。十八世紀時代のそれをだれもラダイツというものはないことはたしかなことである。また、広いイギリスのことである。二十世紀に入つてからでも、どこかで、だれか、機械打ちこわしをおこなったものがあるかも知れない。あるいは、これからおこなうものが出るかも知れない。しかし、いづれにしても、ラダイツがそれらのものをふくまないことはあきらかである。もし、それらのものをラダイツとよぶとすれば、それは単に比喩的にそうよぶにすぎない。かくて、ラダイツといえ、一九世紀の初葉イギリスにおこつた機械打ちこわし運動をおこなったものにかぎられる。それは、まづ異論のないところであるといつてよからうとおもう。しかしながら、それではその時代におきた機械うちこわし運動をおこなったものはみなラダイツかという、そこに問題が生じる。もちろん、みなラダイツとかながえるものはあるまい。しかし、どこまでがラダイツかということになると意見は区々にわかれる。それにつ

ては拙著において論じておいた。¹⁾だから、いま、ここに、ふたたびくりかえすことをひかえたい。ただ、ここには、そこで述べたところを、さらにたちいつて、ほり下げようとおもうのである。

わたくしは、ラダイツの特質として、

一、ネッド・ラッドの名の下に行動したこと

二、イングランドの北部機業地帯を舞台としたこと

三、宣誓をして結合し、組織が強く、行動に統制があり、よく秘密が保持されたこと

四、局地的、偶発的でなく、広汎な地域に計画的、継続的に行われたこと

五、単に機械破壊のみならず革命的色彩さえもうかがわれたこと

をあげ、これらのすべてを綜合するとき、われわれは、それがラダイツを他の機械打ちこわし運動をおこなったものから区別する所以であることをみとめうるであらう、といっておいた。²⁾しかしながら、さらにふかくかんがえてみれば、右の特質をあわせもつものがなぜラダイツであるのかということになる。すると、ラダイツはそれらの特質をあわせもつていたからであることたえるほかないわけである。そうすれば、そこにみられるものは、卵と雞の先後を論ずると同様、一の循環論法でなければならぬであらう。それで、結局のところは、一のネッド・ラッドの名の下に行動したものをラダイツというだけのことになるであらう。そうすると、いつ、いかなるところでも、ネッド・ラッドの名の下に機械打ちこわし運動をおこなうものはみなラダイツとなるかということになる。そして、それに対しては、そうだとするほかしかなないことになる。しかし、さいわい、そういうものは、他のとき、ところにおいてはおこっていない。だからそれによってわづらわされることはない。といつて、これか

らさき、そのようなものがあらわれたらどうするか、と反問するひとがあれば、それに対しては、つぎのごとくたえよう。それはラドイツではあろう。しかし、われわれのここにいるところのラドイツではないと。けだし、アメリカにジアイアンツという野球チームがある。日本にもジアイアンツとよぶ野球チームがある。いづれもジアイアンツチームである。それをいなむわけにはゆかない。しかし、だからといって、二者はおなじではない。それとおなじことである。それでは、われわれのここにいるラドイツと他のラドイツの別はどこにあるか。それが問題となるであらう。だが、そのとき、そこで、さきにかかけておいた、二以下の特質が生きてくる。

他のとき、他のところでネッド・ラッドの名の下に行動するものはよし、あつても、右のごとくかたづけることができる。しかし、おなじころ、おなじところで、ネッド・ラッドの名において行動しないで機械うちこわし運動をおこなったものはどうするか。それがいま一つの問題である。もちろん、それをラドイツにふくめることはできない。といえは問題はない。しかし、実質においてそうかわりがありうるわけはないであらう。実質上かわりないにもかかわらず、それを除外するということは、わりきれぬものをのこすことをいなみたであらう。しかしながら、ラドイツはいわば団体の固有名詞である。固有名詞である以上、同一性格のものでも区別されるのはやむをえない。結局、ラドイツはイギリスにおける産業革命時代をいろどる機械うちこわし運動をおこなったものの一つであるということになる。ただしそのクライマックスをなすものではある。

機械打ちこわし運動とラドイツの関係については、さらに、のべねばならぬことがある。これまでのべたところは、機械打ちこわし運動の中におけるラドイツの問題であるが、これからのべようとするところは、それとは逆に、ラドイツ運動の中における機械打ちこわし運動の問題である。それについては、まづ、ラドイツは機械打ちこわし

のほかのことをおこなわなかったかどうかということが問題としてあげられるかも知れない。しかし、それはあまりにもあきらかなことである。問題にするまでもないところである。ラダイツは機械打ちこわしをおこなったものである。しかし、そのことは、ラダイツは機械打ちこわしのほかのことはおこなわなかったということを意味するものではない。そして、事実、ラダイツは機械打ちこわしのほかにもいろいろのことをおこなっている。資本家らの暗殺もやれば、武器の掠奪もやっており、食料暴動にも関係しておるし、盗奪さえやっておる。けっして、機械打ちこわしのほかはやっていないのではない。そのことは拙著においても、すでにあきらかにしてある。いまさらあらためてのべるまでもないところといつてよからう。

それでは、なにを問題とするのか。

ここに問題としたいのは、ラダイツの運動を、単に機械に対する小生産者たちの盲目的な反抗であるとみる従来の説に対して、機械破壊し運動は、産業革命前および産業革命の初期の段階においては、賃上げその他を目的とする団体交渉の一つの戦術であつたとするホブスバウズ(Hobsbawm)氏のみかたである。なるほど、そういうみかたもできよう。わたくしは、かならずしも、あえて、それを否定しようとするものではない。しかしながら、そうだからといって、そのことは、ラダイツが機械打ちこわし運動をおこなつたということを否定することにはならない。そして、ラダイツが機械打ちこわし運動をおこなつたものとしてとりあつかうのになんの不可があるであろうか。ラダイツを機械打ちこわし運動をおこなつたものとしてとりあつかうことにはならない。ラダイツは、機械打ちこわし運動をおこなつたものとしてとりあつてこそ、ラダイツをただしくとりあつかうことになるというべきであらう。けだし、ラダイツのラダ

イツたる所以は機械打ちこわしをおこなったところにこそみいだされるのであって、団体交渉をおこなったところにみいだされるわけではないからである。なんとすれば、団体交渉ならば、なにもラディツにかぎることはないであらう。いまでもある。いな、むしろ、いまこそ、かえつて、さかんであるといえよう。ラディツを特色づけるのは、団体交渉が機械打ちこわし運動にまで発展、爆発したところにあるといわねばならない。それを、ただ、団体交渉に帰してしまえば、もはや、ラディツの特色はないことになってしまふといつても過言ではあるまい。ラディツの運動を団体交渉と規定するのは、なお、人間を生物と規定するがごときものであるといえよう。いかにも人間は生物にはちがいない。しかし、それで、人間を規定したことになるであらうか。それでは、人間は犬や猫と区別がない存在にならざるを得ない。いな、植物だって生物ではないか。そこで人は「万物の靈長」だとか、「かんがえる葦」だとか、「道具をつくる動物」だとかいう規定がでてくることになるわけなのではないか。かくて、ラディツは、あくまで、その機械打ちこわし運動をおこなったものという面において把握せらるべきである。あくまで、その機械打ちこわし運動をおこなったものという面において理解するべきである。その団体交渉はその機械打ちこわし運動の前提としてとりあげらるべきである。そして、ついでながら、前提といえば、ひとり団体交渉のみにはかぎらない。当時における、不況や、食料品の価格の暴騰もおなじく前提として指摘することができよう。

さらに、ホプスバウム氏のみかたをおしつめてゆけば、ラディツの機械に対する憎悪・呪詛は問題ではないことにならねばならぬ、ということにもなるう。しかし、はたして、それでよいであらうか。機械の論理からみちびき出される賃労働者の機械への憎悪呪詛、それをうらがきする当時の資料のかずかずを、われわれは、あえて、無視することができらるであらうか。それができないことはあらためてのべるまでもないところといつてよからう。機械

打ちこわし運動が団体交渉の一つの戦術であつたことにまちがひはないであらう。だが、しかし、それにしても、機械への賃労働者の憎悪呪詛が団体交渉へかれらをのり出させた面のうかがえるということも、また、いなみがたしいといはねばならないのではないか。

しかしながら、機械への憎悪・呪詛を無視するみかたをとるのは、なにも、ひとりホブスバウム氏にかぎつたことではない。アシュトン教授(Prof. J. S. Ashton)のごときも、また、その一人にかぞえてよいであらう。アシュトン教授が機械への憎悪・呪詛を無視するみかたをとるものだといへば、それは、あるいは、いすぎといえるかも知れない。なんとすれば、教授は、「職や食が充分でないひとびと(under-employed and under-fed men)が、かれらの困窮の原因の理論づけにおいて、あまりに精密(over-nice)ではなかつた」といつておるにすぎず、さらに、「つづけて、「かれどがかれらの口からパンをうばつて行くようにみえる機械に打つてかかつたのは、もつともしごくであつた」とさへいい、「失業の中のあるものは技術的変革の結果であつた」ことをみとめてゐるからである。だが、教授は、「しかしながら」といつづけて、「叛逆の年譜(Chronology of Revolt)は紛擾の真因(the real cause of trouble)を指示する。ラディツがミッドランド(Midlands)において靴下編機を、そして、ノース(the North)において力織機を打ちこわしたのは、政治上の事件と凶作が不況の種となつた一八一一年および一八一六年においてであつた」¹⁰⁾という。また、「一史家は『産業革命の惨禍』(the disasters of the industrial revolution)について書いている。もし、かれが、これによつて、一七六〇—一八三〇の年代が戦争によつて暗黒化され、飢饉(dearth)によつて陰鬱にせられたということを意味するのであれば、このことは、(phrase)に對してなんの反對もできない。しかしながら、もし、かれが、技術的および経済的変革そのものが災禍(calamity)の根原であつたということをし

意味するのであれば、その意見は、どうかんがえても、まちがっている」¹¹⁾ともいつている。これによってこれをみれば、アシントン教授の意見は、機械は有利である、それは労働者にとつても、そうである、労働者はそれによって生活が向上している、だから、かれらが、かれらの貧困の原因を機械においてみるのはほんとうではない、したがって、機械打ちこわしの真因は機械のせいではなくて、不況、不況の原因である戦争・飢饉である、ラダイツの場合も、その一例にすぎない、というものとなる。それをつきつめれば、ラダイツの原因、すくなくとも、真因は機械への憎悪・呪詛ではない、時勢のせいだ、ということに帰するとなすをえよう。この場合、教授が機械それ自体と機械の資本主義的利用を区別することをおこたっているかにみえることはしばらくおいてとはぬことにする。ラダイツ発生の因に、右の時勢をあげることにしていえば、わたくしは、それに対して異議をとなえるつもりはもうとない。¹²⁾しかしながら、だからといって、それを強調するのあまり機械への憎悪・呪詛を無視、といつていいすぎであらば、軽視するのはどんなものであらうか。おもうに、不況が労働者を困窮におとし入れる、労働者は困窮の因を機械にもとめる、そこで機械を打ちこわす。そう解せられる。不況は困窮の説明とはなり得るであらう。しかし、それは、ただ、そのみでは、機械打ちこわし運動の説明とはなり得ないであらう。機械打ちこわし運動の説明には、やはり、機械に対する憎悪呪詛を無視・軽視してはならないとおもう。

(1) 拙著、同上、頁一三一—一六。

(2) 同上。

(3) 同上。頁一四五—一六三。

(4) 「社会経済史学」、第二〇巻、第四・五・六号、(一九五四)頁、九一、に拠る。

(5) 拙著、同上、頁一一四。

- (6) 同上、頁一一五参照。
- (7) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830*, The Home University Library of Modern Knowledge, 204, p. 154.
- (8) *ibid.*
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*
- (11) *ibid.*, p. 161.
- (12) 拙著、同上、頁二六九—二七三、参照。中川敬一郎訳、T・S・アシュトン 産業革命、訳者あとがき、(頁一八九) 参照。
- (13) 拙著、同上、頁四八参照。

四 拾 遺

ラダイツの行動は機械打ちこわし運動のみではなかった。しかし、そのもっとも重要なものは機械打ちこわし運動であった。それはいなみえないところである。そういつてよからう。それで、わたくしは、わたくしの著書においても、それに、比較的多くの頁をついやした。そして、その場合、わたくしは、具体的事例として三つの場合をあげた。一、小規模な工場の攻撃、二、大規模な工場の攻撃、三、運送途上における機械破壊がそれである。³⁾その中二の大規模な工場の攻撃においては、ヨークシャーのローフォルズ・ミルのそれをあげておいた。³⁾そして、それはそれで、よいとおもっている。なんとなれば、それはもっとも大規模なものの一つであり、また、正確な資料が豊富に得られ、したがって、その事情をきわめてあきらかにすることができるものであるからである。しかしながら、一の小規模な工場攻撃の事例もヨークシャーのできごとである。そこで、工場攻撃の具体的事例はみなヨークシャーのできごとばかりしかあげていないことになる。それは、かならずしも、感心したこととはいえないであ

らう。それでは、なぜそうしたか。それは、一の場合は単に小規模な工場攻撃の事例というばかりでなく成功した場合の事例を示そうとし、これに対して、二の場合は大規模な工場攻撃の事例というにとどまらず、その失敗した場合の事例を示そうとする意図をもっていたからである。それにしても、他の地方のケースをも引いてもよいといえよう。それなのに、そうしなかった。それはなぜか、それはバランスの故である。いくらラダイツの行動における機械打こわし運動の意義が大であるといっても、あまりにこの点にのみ多くの頁をさくことは全体のバランスを失せしむることになりはせぬかをおそれた。それに、ローフォルツ・ミル事件に匹敵するほど資料の点においてめぐまれている事件が、すくなくともわたしには、みあたらない。そこで、また、バランスを失するおそれなしとしないことになるとかんがえられた。それだからである。しかし、大規模工場の攻撃に関して、たとい、ローフォルツ・ミル工場の攻撃に関しての場合はど豊富正確ではないとしても、資料がないわけではない。なかでも、サムエル・バムフォードの記述しているものは、その尤なるものの一つとして推すに足るとおもう。

サムエル・バムフォードは一七八八年二月二八日、マンチェスターのミドルトンに、モスリン織工の第四子として生まれた。熱血漢で、冒險心に富んでいた。それかあらぬか、議会改革運動に身を投じ、一八一七年、秘密運動のかどにより逮捕投獄せられた。その釈放後二年、一八一九年、ピータールー事件に坐して、ふたたび逮捕投獄の難に会った。しかしながら、ひととなり誠実であった。そのことは、当時の支配層、とくにシッドマウスらをして尊敬の念をいだかした。釈放出獄の後、心気一転、冷静おのれを持し、穩健ことに処した。マンチェスター一帯においては、労働者、改革者の連中の畏敬をあつめた。かれ、もと、詩才にめぐまれ、文筆にたししみ、「わかき時代」(Early Days)、「遍激家の生涯」(Life of a Radical)なる二書をのこした。マルチノー女史は、その「三〇年

平和史」において、その真実性を称揚、しばしばそれより引用している。もつて、その信頼にあたひするを知るに足るであろう。そして、われわれは、その「わかき時代」の中に、かれがマンチエスターにおける暴動 (A Riot) と、ミドルトンのバートン氏の工場攻撃 (Middleton Fight) の模様をしるしているのを見ることができ。してみれば、われわれは、それらにおいて、いまのわれわれにとつて、きはめて価値ある資料をみいだすとするをばからぬといつてよからう。そこで、ここに、それらを引用することは、かならずしも意義のないことではないであらう。

もつとも、マンチエスターの暴動は直接には工場攻撃に関係はない。單なる暴動である。そうすれば、ここに引くのはどうかとおもわれぬでもなからう。しかしながら、工場、それも大きな工場の攻撃は、また、一つの暴動にほかならないはづであらう。しからば、それをあきらかにすることは、やがて、工場攻撃をあきらかにすることの上に裨益するところなしとしないことになるであらう。そうすれば、いまバムフォードのそれについての記述があるこそさいはひというものである。この場合、われわれには、それを、單なる暴動の記述としてしりぞけるほど寡欲であるべき権利はないとおもう。それでは、それは、いかにあるか。それはつぎのごとくである。

このころのことであつた。マンチエスターの当局とウルトラ勤王家連中のあるものたちがかれらの最初の重大な政治上の過誤を犯したのは。わたくしはそれをまのあたり^{at hand}にみた (which occurred in the sphere of my observation)。チャールス・ウッド (Charles Wood) がその年の市邑の奉行 (Borough reeve) であつた。わたくしはそうをほえている。そして、たしか (if I mistake not) かれの名の附いたアラカードが**出され** (exhibited)、マンチエスターおよびその附近の住民に摂政、後のジョージ四世に祝辞を通うす目的でセント・アン広場 (St. Ann's Square) に集合するようよびかけた。所定の日、附近の町村からの人はおびただしい数にのぼつた。そして、このくはだての本来の計画者たちは、それを遂行する力なきを^{being}おそれて、まったくわきへはなれて、

かれらの企図をすっかり放棄した。群集は、集会が行はれるにいたらなかったので、広場で円陣をつくり、議長を指定し、ある決議を通した。それは、本来行うことに計画せられていたものとは逆の傾向のものであった。そうこうしている中に (Meantime)、集団が他のあちこちで過激な行動に出はじめた。田舎ものとおぼしき風体の五六人のものが、エクスチエンジ・スツリート (Exchange Street) から広場への入口で一人の紳士にはなしかけ、悪態をついたあけく、手を下し、手にした棒でかれを打ちはじめた。かれは、どこかの店に逃げこもうとした。しかし、ドアも窓もきわめてかたくとざされていたのでだめだった。ひとびとはかれを打ちつづけた。かれの帽子は打たれて飛んだ。かれは頭に——その前部がすこしはげあがっているのをわたくしはみた——数箇の打撃をうけた。わたくしの感情、ひいきは、これまでは、すべて民衆の側にあった。しかし、わたくしは、この卑怯な暴行を目撃して、義憤と嫌惡の情なきを得なかった。かれらの中に制りこんで、「おい、馬鹿なことは止せ」 (For Shame, men) とわたくしはいった。二、三つの打撃を払ひのけたが、わたくしは腕と肩を数回打たれた。そのとき、一軒の店の中のたれかが、様子をうかがうふうで (as if to see what was the matter) ドアをあけたので、その紳士はすべりこんだ。そしてドアはたちまち、またとざされ、栓がおろされた。

ちようど、そのとき、大きなさけびこえが取引所の近くであがった。そして、みんなその方向へかけて去った。わたくしはゆつくりとそのあとにつづいた。わたくしが、そこについたとき、多勢のものが、椅子やテーブルやベンチを郵便局の上にあたる窓から投げ出していた。そして家具はすばやくこわしつくされ、その破片はランプや建物の正面の窓を打ちこわすの使用された。暴徒 (mob) の他の一隊は大きな室にいた。そして、邪魔になるもの、あるいは、かれらの邪心にさわるものは、なんでもかもうちこわしていた (breaking and destroying everything)。テーブルや椅子の破片が窓から街路へ投げ飛ばされた。そして、また、投げかえされた。高価なシャンデリアがこな微塵にこわされた。そして、最後に、礫の山がきづかれ、火がつけられた。このとき、警察とカンパランド国民軍の一隊が到着した。火は消された。そして暴徒 (rioters) の若干名が拘引せられた。スコッ

ツ・グレイスの一、二隊がその後間もなくその姿をあらわした。そして、街路を掃蕩しはじめた。そのときは、倉庫の時間であったので、わたくしはわたくしの仕事へといそいだ。⁴⁾」

ちなみに、かれは、ただ、このころといっているだけである。日時は明記していない。しかし、これは、一八一二年四月八日のことである。集会が最初にこの集会を計画したものの意図するところと逆の傾向の決議を通したのは、かならずしも偶然ではなかった。それは一部人士の計画的行動であった。もちろん、かれらは最初にこの集会を計画したものではない。別の連中である。⁵⁾

つぎに、バートン氏の工場攻撃の記述をみよう。それはつぎのごとくである。

ある午後、われわれは倉庫にいて、町にはいった報導におどろかされた。それはミドルトンにあるバートン父子商会 (Messrs. Burton and Sons) の力織機工場が機械打ちこわしの意図をもつ多数の暴徒の襲撃をうけ、暴徒の数名が射殺され、負傷者多数というのである。その晩倉庫をしめると、すぐ、われわれは、もちろん、ミドルトンにとんでいった。ついてみると、報導はほんとうであった。

この日 (四月二〇日) の午後二時ころ、その町の住人は多勢の人の出現におどろかされた。かれらの多くは棒切れや棍棒で武装し、周囲の各地区から同時に町についたものである。山の手 (the upper part of the town) の食料品店が数店乱入をうけ、パン、ベーコン、およびグロウサリーズを掠奪された。金を出して掠奪をまぬがれたところもあった。暴徒はあらゆる地方から一時に到達したものとく、小部隊が集ってタインバイク道路で本隊を形成し、全体で下町 (the lower part of the town) に進み、そして、そこで、かれらの到着を待っていたとおもわれる他の大群集がこれに合流した。この年一八一二年―には王国内の製造業地帯の各地においておびただしい機械打ちこわしがあった。そして、狂態がランカシャーに蔓延したとき、バートン商会の

力織機は、すぐ手織工たち (the hand-working operatives) の大部分の注意と敬意をひいたものとおもはれる。かれらは、秘密委員を通じて、不人気な機械の停止乃至打ちこわしのための合同手段のためしばしば秘密に会合していた。これらのなりゆきを、バートン商會は、おそらく、知っていたであろう。というのは、その織工、仕上げ工および監督の多数が工場内で、これよりさき、しばらくの間、火器使用の訓練をうけたことがあるからである。小規模も二片工場内の正門に面したところにかかけられたし、工場防衛に必要とおもわれる万全の措置が講ぜられていた。これらの方略は、エマニユエル・バートン氏が採配をふるった。氏は労働者たちの尊敬をうけることあつく、かれらにじぶん自身の抵抗精神の一部をふきこんでいた。

暴徒迫るの報導が工場に達するや、操業は停止せられ、全工員は、工場防衛にあてられていたもの以外は、家にかえされた。暴徒は市場の広場 (market place) でしばらく停滞した後、工場のあるウッド・ストリートの奥に進み、そして建物の正面でとまつた。暴徒を案内してきた三、四十人の子供が喊声をあげ、投石して窓をこわしはじめた。これに應じて工場から多数の発射が行われた。しかしたれも負傷したとおもわれなかったので、ふたたび喊声があげられた。そして叫喚は拡がって行つた。「なんでもありやしない。実弾をよう射つものか」と。そしてまた投石がはじまった。いまや工場からは別の発射がおこつた。そして暴徒の中でこのような場合の経験のあるものは、その音がちがつてをる、実弾が発射せられてをる、といった。それはすぐ確実になつた。というのは、数名が負傷し三名が射殺されたからである。これを見ると暴徒は四散した。間もなくスコツツ・グレイスの軍兵が町にはいった。カンバーランド国民軍が、すぐそれにつづいた。そこで街路が掃蕩された。それから騎兵はマンチェスターに歸つた。そして国民軍が工場内に宿営した。

この不幸な事件における負傷者の真実の数は判明しなかつた。だが、四人——みなわかい男——が殺されたことはすぐ確認せられた。ジョセフ・ジャックソン (Joseph Jackson) 十六才と、デヴィッド・ノット (David Knott) 二十才、二人ともオルダム (Oldham) の出、がチャペル・ストリート (Chapel Street) の端で殺された。ラドクリフ・ブリッジ (Radcliffe Bridge) のジョ

ン・シッダール (John Siddall) 二十二才、が街を降って行ったところで殺された。そして、ロード (Road) 出の青年ジョージ・アルビンソン (George Albinson) は、街道を行く際負傷し、応急救護が手近に得られなかったので、やがて出血のため死亡した。わたくしが街についたときには、すべては静穏で、ドアは閉ざされ、酒場もひっそりとしていた。だが、ひとびとの心は悲哀に燃え、バートンとその射撃者に対して烈しい非難が吐かれた。だが、店を掠奪した人間に対してはほとんど怒りが表明されなかった。殺されたものの中の一人の上衣のポケットの中には乾葡萄 (currants) 半ポンドがあった。掠奪の産物であることは疑ひない。

わたくしがいまこれらのことを述べるのはそれが事実であるからである。真実を求むる以外なら他意はない。ただし、あの当時は、わたくしも、町のたれもと同様、射撃者に対して強い憎惡を抱いたものである。

わたくしの妻は無事に家庭にいた。だが、わたくしの妻が、暴徒をみたいという好奇心にかられて、街をあるいて行って、他の思慮のない一、二の婦人といっしょに工場のはとんど向い側の青弾の距離にある一軒の小屋の窓のところに、そして、一人がたおされた場所からわづか数ヤードはなれたところに立っていたことを知ったときには、わたくしは非常におどろき、かつ、非常に感謝した。わたくしはそのようなまいにに対してかの女に、ごをいった。おそらくわれわれの結婚後はじめてのものであったろう。かの女はその愚をみとめて、二度とそのようなことはしないと約束した。そして、かの女はけっしてしなかった、わたくしはおもう。

この多事の日翌朝、わたくしはいつものとおり、マンチエスターに出勤した。そして午後われわれはふたたび、前日より大きな暴徒がミドルトン襲い、エマヌエル・バートン氏およびその労働者数名の住居を焼きはらったという報知によっておどろかされた。その晩ミドルトンへの帰途、わたくしは頼ぶちやマホガニー材の破片を手にもってマンチエスターにかえる人々に会った。その日は暴徒はまったく死にものぐるいに打ちこわしに熱中した。だが前日より用心深く、その軍を分かち、強力な

一隊が工場を脅威し、そうすることによって国民軍をその場に牽制する一方、他の隊は前日工場防衛にあたつた労働者たちの中のあるものたちの家に行った。そしてかれらが家にいなかったで、その家具を街路に積みかさねて火にかけてうちこわした。うしてバック・オス・ブローウ (Back o' Brown) の一軒の小屋とクラブ (Club house) の他の二軒の小屋の家具がうちこわされた。暴徒は——これは知っておかねばならないところであるが——この日は、銃・ハサミ・古剣・棍棒および刃把なぐさで武装していた。

オルダム、ホリンウッド (Holnwood) 附近から来た炭坑夫の一隊は鶴嘴 (mattocks) をもっていた。そして、それでもって家の端を打ち倒している最中、他の場所によばれて行つた。そのわけはこうである。これらの暴行がバック・オス・ブローウやクラブの家々で進んでいるとき、他の一隊の暴徒がロードに向つて出かけた。炭坑夫たちがよばれて行つたのはこれを支援するためであつた。パークフィールド (Parkfield) にあるエマヌエル・バートン氏の邸宅はかれらの復讐をそる第一の対象であつた。家族は家をあけて避難していた。暴徒は早速、穴蔵あなぐらと肉房を荒らしてしまつた。わかい連中は砂糖の塊をガリガリと噛り、または、ジャム壺をなめつくした。他方、としかさの連中はビール樽や酒瓶をあけたり、食料室や貯蔵室のものをかかつてにほうばつた。その仕事がつむと、うちこわしの仕事ははじまつた。そしてほとんどすべての家具が回復しがたいまでにうちこわされた。暴徒の中に二人の姉妹がいた。これはわかいアマゾンに擬してもよからう。掠奪において非常にアクチヴであり、ひとを指揮するに非常に勢力があつた。だが、かの女たちの周囲の若干のものもクレン (Clen) とナン (Nan) といひ、町はづれに住む老いた織工の娘で美しい姿体をしていることだけしか知らなかつた。この二人は一つの室にいた。その室の窓には軽いモスリンのカーテンがかかつていた。また軽い木綿のカバーのかかつたソファもあつた。そのほかにはうちこわしをするのにこつているものはなにもなかつた。この室ではこの二つだけしかなかつたので「さあ」と一人が他にいつた、「仕事をかたづけよう」。そして床にあつた屑をとりあげて、壁暖爐に燃え残つていた火でもやした。たちまちソファが焼けた。ソファはカーテンを火にした。ソファとカーテンは火を床と窓につたえた。そして、半時間ばかりたつと、建物中で一本の梁も一枚の板も焼けないで

こつたものはなかった。

つぎにうちこわしがくわだてられた。ところはロードにある老バートン氏の邸 (the mansion and farmstead) で、いま述べたばかりの場所のつい近くである。暴徒の一部はすでにその地をうろつきまわり、数人のものが邸内に侵入して行動を開始していた。そのとき動揺と踏の音がしたので、かれらはふりかえてみた。すると、スコツツ・グレイスが間近にせまっていた。一瞬の中にかれらは逃散した。そして高仙な邸宅はたすかった。

グレイスがパーク・ハウス (Park House) とロードにおける暴徒を駆けちらしている一方、同じ聯隊の他のものは国民軍の援助の下にミドルトンから暴徒を掃蕩していた。それをかれらは迅速有効にやつてのけた。しかしながらその勤務の遂行にあたつては従前の場合におけるこれら二隊の習慣よりもより嚴重なるものがあつた。オルダム出のジョン・ニールド (John Neeld) という男はオークリントン・ホール (Aldington Hall) 附近で逃亡せんとして、グレイスの一人によつて身体を射抜かれた。また、別の男は、トンジ・レーン (Tonge Lane) 附近で、グレイスの一人のために射たれ、放置せられて死んだ。また、自分の家の窓から見物していた一人の女が、やはり、同じ隊の一人から射たれて腕に貫通銃創を受けた。しかし、国民軍の一軍曹はオルダム出のジョンソン (Johnson) という一老人を射つたためにいつまでも消えぬ極度の憎悪をうけた。ジョンソンはチャーチ酒場以上には暴徒にも工場にも近づいていなかった。そこでかれは家族のものたちといっしょに台所に腰かけてパイプをくゆらし、エールを二杯かたむけていた。夕方近く、騒動もすっかりおわたとおもわれるころ、かれは教会の庭にぶらぶらといひつて行つた。そして手を上衣のポケットにつつこんで立ったまま、尖塔の端の墓石にきざまれた文字を読んでいた。その折、一人の軍曹が一人の私服の国民兵と、家兎飼養場を上つて来て木の間からかれを見つけた。軍曹は折敷きをして、ねらいを定め、発砲して老人を射殺した。弾はかれの頸を貫通した。

追跡の際、多数の弾が兵士にむかつて射たれた。しかしながら、馬の事故によるもの以外には負傷したものは一人もなかった、

とわたくしは信ずる。暴動中多数のものが収監された。そしてその後多数のものが一時國をすてた。例の二人のアマゾンの女性
は逮捕を逃れた。そしてほんとうの指導者で告発せられたものはいくつもあつた。その一方、暴行にかかりあいのない
ことわたくし自身とおなじであるものが数名、ケント (Kent) という悪い、半氣ぢがいの、しかしながら、奸智にたけた亮春
婦 (Joan) の密告で投獄され、裁判に付せられ、有罪となり、長い監禁の宣告を受けた。⁶⁾

われわれはこの記述よりして、いろいろのことを知りうる。まづ、労働者が工場を攻撃するというが、攻撃する
のはその工場につとめている労働者ではない。その工場につとめている労働者は、むしろ工場防衛の立場に立つて
いる。しかも、工場主の気概に感染してさえているのを見る。労資の抗争といつても、かならずしも雇傭者とその被
傭者の間のそれとのみはいえないことがわかる。労資闘争のもつれから、資本家への憎悪のとはつちりが機械にか
かるということは、すくなくとも、かかるところでは適用できないのではなからうか。また、機械打ちこわし運動
は、普通、暴動のかたちにおいてあらわれる。そして、すでに暴動のかたちにおいてあらわれると、ひとりその機
械に直接利害関係あるものだけでなく、利害関係のないものまでが、それに加わる傾向がある。そのことは容易
に想像しうることであろう。そして、この記述はそれを実証してくれている。

なお、上院秘密委員会報告 (Report of the Secret Committee) にはバートン氏の工場に対する第二回の攻撃は
四月二日といっているが、この記述では四月二日となっている。これは、やはり、この記述がただしいとしな
ければならない。ハモンドも、「上院秘密委員会は日付を三日としている。これは二二日の明白なるあやまりで
ある。(This is clearly a mistake for 21 st.) と記している。⁹⁾ 拙著においては上院秘密委員会の報告により二二日
となっている。ここに訂正をおきたい。ついでながら、その際、「工場は放火の厄をまぬがれることができな

かった」としているが、その工場というところは「工場主邸」でなければならぬ。¹⁰⁾ 脱落である。これはわたくしの粗忽である。

- (1) 拙著、同上、頁一二三—一二四。
- (2) 同上。
- (3) 同上、頁一二六—一二四。
- (4) Banford's Passages in the Life of a Radical and Early Days, in two volumes, edited with an introduction by Henry Dunckley, London, 1898, vol. I, Early Days, pp. 240-242.
- (5) J. L. and B. Hammond, The Skilled Labourer, 1760-128, 2. edition, London, 1920, p. 286-7.
- (6) Henry Dunckley, *ibid.*, pp. 246-260.
- (7) Annual Register, 1812, State Papers, p. 387.
- (8) J. L. and B. Hammond, *ibid.*, p. 289.
- (9) 拙著、同上、頁一二六。
- (10) 同上。